

ローカル（出身地）からローカル（居住地）へ —在米日本人の「県民」アイデンティティ—

木場安莉沙(大阪大学/日本学術振興会)

1. はじめに

本研究は米国サンフランシスコに住む在米日本人を対象としたインタビューの質的分析から、「日本人」というアイデンティティだけでなく「〇〇県民」といったようなローカル・アイデンティティが、いかに米国での語り手の生活や自己の位置づけに関与しているかを示すものである。これまで在米日本人/日系人のアイデンティティについては、宮崎（2004）、南川（2005）、宮内（2011）、黒木（2016）などで考察されてきた。しかし、「日本人/日系人」としてのアイデンティティ分析に終始しており、語り手が「〇〇県民」「〇〇出身の日本人」といったようなよりローカルな出身地に基づくアイデンティティを米国での自己の位置づけにどう関連させているのかについては詳察されていない。

山田（2011）は「自分を「江戸っ子」,「世田谷区民」,「生まれも育ちも葛飾柴又」などと意識し,またそれを表出すること」をその人物の個人的なローカル・アイデンティティの意識や表出であるとしている（山田 2011: 156）。また,田中（2008）の在米日本人に関する研究や中澤ら（2008）の在米日本人に関する研究では,インタビューはホスト社会における自らの位置づけに「日本人」だけでなく,よりローカルな出身地を持ち出している（民族アイデンティティを「日本人であり,名古屋人」と説明するなど）。こうしたことから,在外生活を語る上で上記のようなアイデンティティはナラティブの構築やライフストーリーの意味づけに欠かせないと考えられる。

本研究ではナラティブ内で人の性的アイデンティティや民族的アイデンティティがどのように構築/交渉されるかを明らかにする目的から,これまでに国内外で複数の性的少数者や在外邦人のコミュニティに人脈を構築し,日本で10人11組,サンフランシスコで11人9組から単独またはペアでインタビューを行ってきた。本発表ではサンフランシスコに滞在する関西出身の日本人3名のデータを取り上げる。インタビュー協力者のプロフィールは以下の表1の通りである。

表1. インタビュー協力者のプロフィール

	国籍	出身地域	サンフランシスコ在住歴	性別
S	日本	大阪府	4年	M
N	日本	大阪府	1年半	M
K	日本	京都府	10年	F
A (IR)	日本	大阪府	-	F

インタビュー協力者によるローカル・アイデンティティの構築,すなわちアメリカ社会において「〇〇県民」「〇〇出身の日本人」であるとはどういうことなのか,またそれを動的な相互行為の中で話し手がどのように表すのかを明らかにするにあたって,本研究では動的なアイデンティティ構築の場とされる（Georgakopoulou, 2006）ナラティブ（語り）の質的分析を行う。また,話し手や聞き手がトークの中で（トークを通して）自分がある人物として取り上げるのに伴って築かれるとされるポジション（Davies & Harré, 1990）に着目し,こうしたポジションを築く行為であるポジショニング（位置づけ）が語りの中でどのように行われ,話し手や話し手が語る対象がどのように位置づけられているかを分析する。

2. データ分析

2.1 Sのデータ：ホスト社会との親和性

本章からは実際のインタビューデータから話し手のローカル・アイデンティティがどのように表出されるかを見てゆく。データ1の直前では、Aの「米国に住み始めて文化などの違いから困ったこ

```
<データ1>
100. S: ん： やっぱりでも大阪出身っていう
101. A: @@
102. S: ことで： そういう： のにはすごく入りやすいと思うよ
103. 大阪の人って[アメリカで
104. A: [あ：：
105. S: [あの
106. A: [( ) はっきり言う方[ですもんね
107. S: [はっきり言う方だし馴染みやすい
108. っていうふうに言われてるね
```

とはあったか」という質問に対し、Sが言語表現の違いを挙げている。100-102行目でSが「大阪出身の人は（アメリカ文化に）入りやすい」と発言すると、これに同意しつつ内容を補う形でAが「はっきり言う方ですもんね」（106行目）と答え、Sが「はっきり言う方だし馴染みやすい」（107行目）とオーバーラップしながら発話を続ける。106行目のAの発話や108行目のSの発話に話し手の知識が聞き手の知識と一致すると判断された場合に用いられる終助詞「ね」の使用（益岡, 1991）が見られることなどから、ここではS、Aの出身地である大阪の言語表現が「はっきり言う」性質のものであり、よって米国文化に「馴染みやすい」という共有知識（林, 2008）が確認され、ともに大阪出身であるSとAのローカル・アイデンティティが表出されている。

2.2 Nのデータ：他地域との混同の忌避

データ2では、Nがサンフランシスコの「ジャパントウン」にて毎年開催される「大阪祭」について述べている。インタビュー全体を通してNおよびAは「標準語」ないし「共通語」（中井, 2007）とされるスタイルの日本語を使用しているが、6行目でNが「関係無いやん」と大阪方言を使用するとAもこれにオーバーラップしながら「大阪ちゃうやん」（7行目）と発話しており、

```
<データ2>
1. N: 阿波踊りの（団体名）があったりとかするんですけど
2. A: @@
3. (.)
4. N: 大阪祭で踊って（ ）（ ）関係ない
5. A: hh 阿波踊り徳島ですよhh
6. N: hh もう全然関係無いやんと[思っ
7. A: [h 大阪ちゃうやん h
```

大阪方言への収斂（Giles et al, 1991）が見られる。つまり、「大阪祭」で大阪とは「関係無い」徳島の文化が紹介されるという事柄に対して、ともに大阪出身であるNとAが批判的意見を述べながら大阪方言への切り替えおよび収斂によってローカル・アイデンティティを顕示しており、談話の内容と方言使用の双方から「大阪出身」というアイデンティティを共同構築していると言える。

2.3 Kのデータ：ホスト社会との対照性

データ3は、直前の部分でKが「アメリカと日本の違い」として「アメリカでは個々人の違いが尊重される一方日本では均質的であることが前提とされ、そうでない者は「変わっている」として排除される」という語りを構築し、その中で自分を「変わってる」（33行目）人間として位置づけている。この

```
<データ3>（セクション1）
33. K だからたぶん自分もちょっと変わってるんだと思うんですね
34. まあ あるいは自由に育ててもらったから
35. A: ん：
36. K: あんまりこう型にはまらずに 私は京都の生まれなんですけど
37. お茶もお花もhせずに：h
```

自らに対する位置づけに際して、「京都の生まれなんですけどお茶もお花もせずに」（36-37行目）ということが位置づけを強化する要因として補足されていることから、「お茶」および「お花」は日本的な価値観の象徴であり、そうした「型にはまらずに」生きてきたK自身とは相対する位置に置かれていることが分かる。このことをさらに強化するのが同じセクション内のデータ4である。データ3とデータ4の間では、Kが（サンフランシスコ以前に住んでいた）ロサンゼルス滞在時に日系3世でゲイであるお茶の先生から免状を貰ったということ、また、その先生が「意地悪」で、「面白い」が「難しい」人であった、ということが語られている。

```
<データ4>（セクション1）
62. K: 私は元々そのお茶出しを女性がするもの
63. A: あ：：
64. K: だというのが嫌で：hある意味そっから出てきた
65. 日本から出てきたとこがあって
```

データ4の談話から、Kが「お茶出しを女性がするもの」とする価値観を日本に、それに反発する自らの価値観を日本とは異なるところ（米国）に位置づけていることが分かる。データ3での習い事としての「お茶」と、データ4での「お茶出し」が（同じ「お茶」という言葉が使われているとはいえ）どのように繋がっているのかここでは不明瞭であるが、データ4の後に続くロサンゼルスでの職場に関する説明を経て語られたデータ5およびデータ6から明らかとなる。

<データ 5> (セクション 2)

26. K: トップのあの(上司)さんというね 彼は三世で
27. A: °ん:°
28. K: °あの:° 彼はほんとエリートなんですけど↑ね
29. につけ 日系アメリカ人の
30. で彼はね そんなね絶対出したらいけない
31. 言ったんですよ私に
(中略)
40. K: それはカッコいいなと思ったんですよ

<データ 6> (セクション 2)

56. K: あの三世の>ゲイのお茶の先生く
57. もうKさんそんなことは:て@@
58. 言うんですよその 綺麗な京都弁 @てか
59. すごい京都弁で@
60. A: [はあ:
61. K: [もうそんな:て言って それあの あの
62. 当たり前だけど出してくださいって言って

データ 5 とデータ 6 では 2 人の人物 (ロサンゼルス滞在時の上司とお茶の先生) の「お茶出し」に関する態度が対照的に位置づけられている。2 人はともに日系 3 世であるが、前者は (社内での立場が弱く、若い女性である) K がお茶出しをすることによって来客が K を見下すことを懸念し「自分が代わりに出すので K はお茶を出してはいけない」と発言し、これを K は「カッコいい」(データ 5: 40 行目) と肯定的に評価する。対して後者は、「当たり前だけど出してください」(データ 6: 62 行目) と K がお茶出しすることを当然視している。データ 3 で京都の「お茶」や「お花」が日本的な価値観の象徴として位置づけられていたことを併せて考えると、「綺麗な京都弁」「すごい京都弁」(58-59 行目) という情報が追加されることにより、お茶の先生が日本的な価値観の持ち主であることがより一層強調されていると言える。また、お茶の先生が職場で女性がお茶出しすることを当然視していたという談話によって、データ 3 での (習い事としての) お茶に関する談話と、データ 4 でのお茶出しに関する談話との間の結びつきが明らかとなる。K の一連のナラティブをまとめると以下ようになる。日本にいた時の K にとっての「お茶」とは、出身地である京都と結びつくものであり、また職場でのお茶出しの習慣から自分とは相反する抑圧的な価値観の象徴でもあった。ロサンゼルスに移ってからは、お茶の教室に通い免状を貰ったということから日本的アイデンティティの象徴として希求していたことがうかがわれ、「自分とは相反する価値観の象徴」という位置づけは多少変化したと言える。また、職場での上司の存在は解放的な価値観の象徴として位置づけられている。しかし、同じ日系 3 世であり熟達した京都弁話者であるお茶の先生がこれと反対に抑圧的な価値観の象徴として位置づけられ、「お茶」に依然として抑圧的な側面を与え続けている。

3. 考察

以上の分析を踏まえて、3 名の話し手がホスト社会である米国との関連の中で自らのローカル・アイデンティティをどのように表出させているかを考察してゆく。データ 1 の S は、米国の人々の言語表現を自らの出身地である大阪の言語表現と文化的に近いものとして位置づけることによって出身地とホスト文化との親和性というナラティブを構築し、大阪出身であるというローカル・アイデンティティが米国での生活を馴染みやすいものにしたことを裏付けている。またこの発話内容は同じ大阪出身である A によって承認され、共有知識の確認という行程を経て両者のローカル・アイデンティティが協働的に確認されている。

データ 2 では、ホスト社会において大阪とそれ以外の地域を混同されることについて N が抵抗を示すナラティブを構築し、4 行目の「関係無い」を 6 行目で「関係無いやん」と大阪方言に切り替えて言い直すことで、ローカル・アイデンティティをより明示化させながらこの抵抗を強化している。A の発話内容への賛同と大阪方言への収斂によって、ここでも両者のローカル・アイデンティティが確認されている。S, N 両者のインタビューにおける A の同意・承認は、S や N を「同じ大阪府民」として位置づける相互行為的ポジショニング (Davies & Harré, 1990) であると言える。

データ 3-6 の K のナラティブでは、日本や出身地の京都およびその価値観を象徴する「お茶」は、米国ならびに K 自身の価値観とは相反するところに位置づけられている。京都にいた間には習わなかった「お茶」をロサンゼルスに移住してから習い始め免状を受け取ったという K の行動は、「滞在年数が少ない (特に 10 年未満) 時期は自らのルーツである日本文化に意識が向く時期である」という田中 (2014) の見解と一致する。また、ハワイに移住した日本人女性に関する宮内 (2011) の研究では、「お茶」は「本物の日本」「もとの (過去の) 日本」へと彼女らを「引き戻す」ものであると考察されている。つまり、日本にいた間は抑圧的な価値観の象徴として機能していた「お茶」が、米国移住後はアイデンティティ希求の手段という側面を持つようになったと言える。しかし、「綺麗な京都弁」でお茶出しという「日本的」な価値観の象徴的慣習を肯定するお茶の先生により、その抑圧的側面は存続される。ナラテ

ィブ全体を通して、K自身は「お茶」ならびにお茶出しに象徴されるような「日本的」価値観と対照的な価値観の持ち主として繰り返し再帰的ポジショニング (Davies & Harré, 1990) を受けている。

4. 結論

本研究ではサンフランシスコ在住の3名の関西出身者のナラティブから、「ローカル・アイデンティティが、いかに米国での語り手の生活や自己の位置づけに関与しているか」について考察した。分析結果から、ローカル・アイデンティティはある時はホスト社会／文化との親和性を築き、ある時は反対にホスト社会／文化と対照的に位置づけられ、ナラティブにおける米国での生活や自分自身に関する語りに関与していることが分かった。このようにローカル・アイデンティティが様々な意味からホスト社会において強く意識される以上、在外日本人の研究においては「日本人」という大きな枠組みだけではなく、よりローカルな社会／文化的背景にも注意を払う必要があることが示された。

トランスクリプト記号

:	直前の音の引き延ばし	(空白)	聞き取り不能	hh	呼気
(.)	小休止	@	笑い	[オーバーラップ開始
° 発話°	比較的小さな声での発話	h 発話 h	呼気を伴う発話	> 発話 <	比較的早口での発話

参考文献

- Davies, B., & Harré, R. (1990). Positioning: The Discursive Construction of Selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20: 43-63.
- Georgakopoulou, A. (2006). Small and large identities in narrative (inter)action. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, 83-102. New York: Cambridge University Press.
- Giles, H., Coupland, N. & Coupland, J. (1991). Accommodation theory: communication, context and consequence. In H. Giles, J. Coupland, & N. Coupland (eds.), *Context of accommodation*, 1-68. Cambridge University Press.
- 黒木雅子 (2016). 日系アメリカ人のアイデンティティ変容—エスニシティ, ジェンダー, 国家を超えて— 人間文化学会紀要, 36, 79-95.
- 林宅男(編) (2008). 談話分析のアプローチ 研究社
- 益岡隆志 (1991). モダリティの文法 くろしお出版
- 南川文理 (2005). 「在米日系人/在外日本人」であることの現代的意味—エスニシティの現代社会論に向けて— 立命館言語文化研究, 17(1), 137-143.
- 宮内壽美 (2011). 海外在住日本人の伝統的日本文化への融合—裏千家ハワイ協会会員に見る〈お茶〉の捉え方と適応を事例として— 政治学研究論集, 33, 13-31.
- 宮崎江里香 (2004). 日系アメリカ人の「ローカル」アイデンティティをめぐる一考察—Rice 対 Cayetano 裁判と多文化社会ハワイ— 多元文化, 4, 179-190.
- 中井精一 (2007). 方言と共通語 荻野綱男(編) 現代日本語学入門 明治書院 pp.146-162.
- 中澤高志, 由井義通, 神谷浩夫, 木下礼子, 武田祐子 (2008). 海外就職の経験と日本人としてのアイデンティティ—シンガポールで働く現地採用日本人女性を対象に— 地理学評論, 81(3), 95-120.
- 田中真奈美 (2008). 海外生活がアイデンティティに与える影響—あるアメリカ在住日本人の経験を通しての考察— 東京未来大学研究紀要, 1, 89-99.
- 田中真奈美 (2014). アメリカでの長期海外生活者のアイデンティティに対する重要性評価の分析—アイデンティティ・アンケート調査から— 東京未来大学研究紀要, 7, 113-123.
- 山田晴通 (2011). 米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設にみるローカルアイデンティティの表出とその正統性 東京経済大学人文自然科学論集, 130, 155-187.